

# 成人期ダウン症候群の認知特性に関する研究

田中ビネー知能検査Vによる認知機能の定型発達児との比較

○伊藤 浩

菅野 敦

(社会福祉法人 幸会)

(東京学芸大学教育実践研究支援センター)

KEY WORDS: 成人期ダウン症候群, 認知機能, 定型発達児

## (目的)

菅野ら(2003)は、ダウン症候群の認知特性について、「他の障害群に比べ均質な知能特性をもつ障害群である」と指摘している。そのダウン症候群の認知特性については、様々な側面からの検討がなされてきた。

視知覚に関しては、視覚的外形を処理するパフォーマンスが定型発達児よりも低いことが指摘されている(S.Vicari et.al:2006)。また、視知覚に関連して注意の移動の困難さ(古賀:2001)や対象認知の難しさ(菊地:2005)が指摘されている。言語に関する課題として、理解よりも言語の産生に遅れが見られることが指摘されている(S.Vicari et.al:2006, D.Fabbretti et.al:1997)。また、文章による理解や言語の内的操作を必要とする課題の達成が困難であるとする指摘もある(菅野他:1998)。数概念に関する課題として、数を数え上げる課題、物を数える課題に定型発達児よりも遅れが認められると指摘されている(J.Nye et.al:2001)。また、数概念に関する課題は他の障害に比べて低い通過率であるとされている(菅野他:2003)。さらには、弁別力において知的障害群よりも困難さが見られる(水田:1975)、言語概念を用いた比較判断の能力に困難さが認められることも指摘されている(菅野他:1988)。

このように、ダウン症候群を対象としてその認知特性に関する研究はなされてきているが、「生涯発達の視点から行った研究はこれまでほとんど報告されていない」(菅野他:1998)と指摘されるように、これまでの研究は児童期・学齢期を対象としたものが多く、児童期から成人期にかけて加齢とともにどのような変化が生じているのかについては十分な検討が行われていない。

そこで、本研究では、ダウン症候群の認知機能が成人期においてどのような特性をもっているのか、また、児童期と比較してどのような差異があるのかを明らかにすることを目的として、成人期知的障害者、およびダウン症者における田中ビネー知能検査Vの結果を定型発達児の検査データと比較検討する。

なお、本研究では、所属事業所の責任者の承諾の下、ご本人またはご家族に調査の目的、データの保管・分析方法について説明し、個人の特定ができない形で論文発表することの承諾を得た。

## (方法)

200X年から200X+15年の期間で、心理アセスメントとして田中ビネー知能検査Vを実施した障害福祉サービスを利用する成人期知的障害者のうち、自閉症スペクトラム障害の診断を受けていないMA6歳未満の95名を対象とする。

対象者をダウン症候群の診断を受けているDS群、それ以外の知的障害のあるMR群にグルーピングし、田中ビネー知能検査Vから得られたMA、および各検査項目の通過率を、田中ビネー知能検査Vの標準化データとして記載されている定型発達児(TD群)の通過率とを比較する。なお、分析は、検査項目の該当するMA年代に相当するMA群の対象者およびその1歳上のMA群の対象者を分析対象とする。具体例として、MA2歳代の検査項目(No.13-24)

は、MA2歳群およびMA3歳群を分析対象とする。

## (結果)

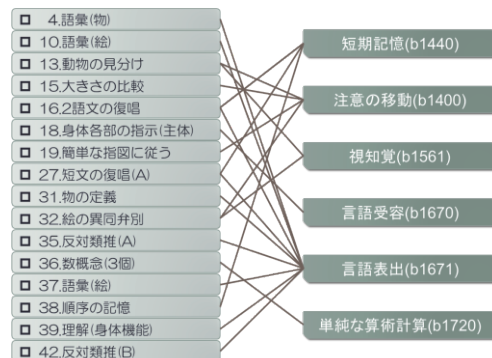
障害種別の対象者数は、MR群64名、DS群31名であった。障害群別の検査時年齢の平均値は、MR群が37.3歳(SD:14.1713, Range:18-66)、DS群が34.0歳(SD:11.5744, Range:18-58)であった。両群の検査時年齢に統計的な有意差は認められなかった( $t(71)=1.20675, n.s.$ )。

田中ビネー知能検査Vにより算出した精神年齢(MA)の平均値は、MR群が2.8歳(SD:1.3591, Range:1-6)、DS群が3.50歳(SD:1.5460, Range:1-6)であった。両群の精神年齢には5%水準で有意差が認められ( $t(53)=2.18029, p<.05$ )、DS群がMR群よりも高いことが明らかとなった。また、MA群別の障害種別人数は、比率の差の検定の結果、有意差は認められなかった( $\chi^2(1)=7.52191, n.s.$ )。

各検査項目の通過率を分析した結果、No.4:語彙(物)、No.10:語彙(絵)、No.13:動物の見分け、No.15:大きさの比較、No.16:2語文の復唱、No.18:身体各部の指示(主体)、No.19:簡単な指図に従う、No.27:短文の復唱(A)、No.31:物の定義、No.32:絵の異同弁別、No.35:反対類推(A)、No.36:数概念(3個)、No.37:語彙(絵)、No.38:順序の記憶、No.39:理解(身体機能)、No.42:反対類推(B)の16の検査項目で、DS群がMR群、TD群と比較して通過率が低いことが明らかとなった。

## (考察)

MA6歳未満の成人期ダウン症候群における認知機能の特性について、成人期知的障害者および定型発達児との比較を行った。その結果、成人期ダウン症候群において田中ビネー知能検査Vの検査項目のうち16の検査項目でダウン症候群の通過率が低いことが明らかとなった。これら16



の検査項目の各課題を解決するために必要とされる認知機能を、ICFの心身機能(個別的精神機能)との関連性で検討した。その結果、短期記憶、注意の移動、視知覚、言語受容、言語表出、単純な算術計算との関連性が示唆された。

これらの認知機能については、児童期のダウン症候群を対象とした先行研究の結果とも合致するものであった。このことから、ダウン症候群における認知特性は、児童期から成人期にかけて大きな変化はないと考えることができる。

(ITOHI Hiroshi, KANNO Atsushi)